

E・S・ブースのキリスト教女子教育理念

鈴木美南子

ユージン・S・ブース (Eugene S. Booth, 1850-1931) は明治十四年から大正十一年に至る四十年間、フェリス女学校の校長としてその発展に尽した。この四十年間といえば、氏にあっては三十一才から七十二才にわたる壮年期であり、フェリスにおける事業は彼の全生涯をかけた事業であったということが出来る。フェリス女学校は、日本に渡来した最初の独身女子宣教師として明治二年に来朝したメリー・E・キダー (Mary E. Kidder、後にミラー夫人) によって、すでに明治三年英語塾として創設せられ、その後、支援団体、米国リフォームド教会外国伝道局の責任者であり、かつ日本のよき理解者であったフェリス博士父子を記念したフェリス・セミナリー (日本名、フェリス英和女学校) として知られつつあったが、ブースが二代目校長として着任した当時は、生徒数わずか十八名で、明文化された学科規定はなく、授業は慣行によって行われ、生徒は平均六ヶ月ほど在学する程度で、一定の修業年限を終え、正式に卒業したものもない未熟な状態であった。

ブースが着任後ただちに開始したことは、慣行で行われていた学科課程、規則を整備編制して制度を確立するとともに、教育内容を米国の女学校並に充実させてゆくことであった。彼は早速十六ページの手刷りの規則書を五〇〇部つくり、全国の要所に配布して趣旨の宣伝をはかり、学校発展の最初の契機をつくった。ブースは、後に紹介するようによい優れた神学者であり、その信仰こそが日本における活動の源泉であり、目的そのものではあったが、同時に、実

務的に優れた手腕と実行力を持ち、彼の伝道と日本の女子教育への熱意はその実践性、実務的資質によって大きな効果をもたらしたのである。

彼は少年時、生地コネティカット州のブリッジポートで大工の修業をしたことがあり、米国で最初の大工による労働組合のメンバーであったといわれるが、このような経歴が彼を神学者、伝道者、教育者であると同時に実務における敏腕家たらしめたといえるであろう。その後彼はフォート・エドワード・スクールに入学し、さらにニュージャージー州、ニューブランズウィックのラトガーズ・カレッジに進み、これを一八七六年に卒業、つづけてニューブランズウィック神学校に入学して、一八七九年に卒業、そして結婚後ただちに夫人エミリー・S・ブースを伴って日本に來たのが同年（明治十二年）十月であった。彼は二年ほど長崎で伝道と教育活動に従事して、その後フェリスに移ったのである。ブースは一九一七年（大正六年）永年の宣教教育活動の功績を認められ、母校ラトガーズ・カレッジより神学博士の学位を与えられている。

ブースによる最初の学則印刷配布によって各方面からいきおい多くの志願者が集まる結果となったが、当時は東京からの通学も不可能な状態であり、特に地方からの志願者が多く、学校自体も全生活的な訓育を目的としていたところから、ブースはその後たびたび超人的な努力によって米国リフォームド派婦人伝道局等各方面から資金を調達し、寄宿舎の完備をはじめとして、校舎の増設、施設の充実に力を注いだのであるが、その結果フェリスの校舎、施設は当時としてはまれにみる行届いた近代的設備をもつものであった。また彼は日本の学校としてしっかりした基礎を確立するため盛んに日本人有力者を招いてその意見を積極的にとり入れ今後の指針とした。ブースはフェリスを發展させるについての彼自身のポリシーとして、まず日本社会の現状とその最も必要とされる事柄について学び、敏速にその要求に答えてゆくことであると述べているが、⁽¹⁾ブースの日本における宣教活動の基本姿勢はそのように社会が真に必要と

するものに鋭敏に、そして信仰的立場から正しく対応してゆくところにあった。それは第一に社会的に無力な女子に高度の教育を与え、男子と等しく社会に貢献しうるものたらしめ、そして女子を通じて日本社会に福音を伝えることであったが、これに附随して、日本の社会的文化的条件の改良——衛生、体格、栄養面から、文化の向上、社会関係の変化までめざしてたゆまぬ努力を続けたのである。彼は特に生徒の健康面に留意したが、「風車の学校」といわれた名高いフェリスの風車は深い地層から良質の水を汲み上げるためであり、寄宿生の食事を改良し、午後は健康上の理由から昼寝をさせ、ミス・メリー・デヨー、平野浜子らにデルサートなる新式表情体操を洋風の体操服でなす方法を開発せしめ、また日本で最初に生徒の体格検査を実施した校長でもあった。さらにミス・ジュリア・モルトンを招きその永年にわたる指導でフェリスの音楽教育の名を高からしめ、また毎週一回、英語による演説、音楽、創作発表などを中心とする文学会を催し、自ら細かく批評を加えて、文芸活動を奨励しながら、次代の女性指導者たるべき素養を身につけさせようとした。これらはすべて日本社会における女子の目覚め、文化的向上という目的に収斂するものであったが、ブースにとって日本における福音伝道は、まさに日本の女子をそのキリスト教的教育理念にのっとって教育することであった。ここに伝道のための手段として英語教育をほどこした初期のキリスト教主義教育から、自覚的に日本の女子教育という事業に取り組む姿勢をブースに見出すことができるのである。このように教育を伝道に從属的なものと考えず、キリスト教精神によって立たせられた時代の指導的女性を育てることに宣教と教育の統一を求めたブースは、真剣に日本の女子教育のあり方を問い求め、当時、同じくキリスト教を精神としながら、外国の力によらないで女子教育を目ざしていた明治女学校の巖本善治とも密接な係わりをもったのである。⁽²⁾ またブースは東京に比べて未だ文化程度の低い横浜のために、横浜一モダンな建築といわれたヴァン・スコアック・ホールの講堂に、名士を呼んで公開学術講演などを催し、土地のさまざまな社会、文化、宗教団体の会合にもこれを提供して、地域の文

化的中心たらしめ、ブース自身も多くの文化団体に所属し公共事業に積極的に協力して地域の発展に貢献し、同時に一般庶民に根強い排外主義やフェリスに対する偏見をぬぐいさる努力を怠らなかつたのである。

ブースの就任のころは日本社会の近代化が急速に進む時期であり、「西欧化イコール近代化」の意識のもとにキリスト教も布教が許され、西欧の文物が積極的に摂取せられ、女子教育の必要が叫ばれはじめていた。そのような背景に加えて、開港地横浜の土地柄から、フェリスの事業は米国海外伝道局の援助ばかりでなく、横浜居住の内外人の理解と援助に支えられたところも少なくなかつた。早くからブラウン、フルベッキ、バラ、ヘボン、ミラーの米国宣教師や、植村正久、井深梶之助、稲垣信、山本秀煌、小崎弘道、村井知至、巖本善治らの優れたキリスト教者の協力を得ていたが、官庁筋の理解、横浜実業界の援助にも無視できないものがあつた。フェリスの創成期に、当時県令であり部落解放運動史に名高い大江卓が、ミス・キダーの事業に感動し、物心両面の多大な援助をつづけ、彼女をして、フェリスの歴史に特にこのことを記憶するよう本国に報告せしめたのはあまりに有名である。時代の要求と、フェリスの英語を中心とする教育が、横浜にとって歓迎すべきものであつたことが、ブースが就任してしばらくの時期、フェリスが急速に発展した重要な要因ではあつたが、またブース自身が学校経営について、先のような基本姿勢のもとに、教育を積極的に地域社会、日本社会に開き、その必要に依つてゆこうとした努力にも負うところが大きい。

ところで、このようなブースの手腕と努力も、日本社会が西欧文明を強く要求している間は顕著な効果をあらわすことができたが、一般的にいつて、封建遺制のうゑに形成された天皇制的国家主義的な近代日本社会のエアトスは、ブースの熱望するキリスト教を精神とする女子高等教育理念の実現を阻害するものであつたことはいうまでもない。それが特に甚しく、彼にとって大きな試練の時期となつたのが、大日本帝国憲法の制定、教育勅語の渙発から「文部

省訓令第十二号」の布告等にいたる明治二十三年から三十三年頃までの日本社会の反動期である。明治二十一年には生徒数一八五名という創業以来の盛況を示したのもつかの間、二十三年以降漸次入学者数は減少し、二九年には三八名にまで減り、本科四年（高等小学校卒業者が本科に入る）を修了した者にもうけられていた二ヶ年の高等科も一時廃科の運命におかれたのである。こうした時期に在学した生徒のほとんどは篤信なキリスト者の子女であり、生徒らもこの苦難期にあつて、在学中に信仰告白をなし、学校はいよいよその使命を強く堅持していった。

リフォームド派の宗教教育、宗教的修練はかなり厳格なものであり、日曜日は共立女学校の生徒らとともに女教師につれられて、海岸教会まで歩いて礼拝に出席し、午後は、サンデー・スクールと厳しい規律で安息日がまもられた。日曜日と水曜日の夜は外部の宣教師、牧師を招いていかなる時も祈祷会が続けられ、日々の生活は、朝拝をもつて始まり、夕拝をもつて終るといふ具合であった。クラスにおける聖書教授の重要さはもちろんのこと、ブースがフエリスの向い側にあつた横浜ユニオン教会の牧師も多年つとめていた関係上、その関係の地域の宗教的集会も多くフエリスでもたれたのである。

このようなキリスト教主義学校の生命である宗教教育の実践を極めて困難ならしめたのが、明治三十二年「私立学校令」とともに公布された「文部省訓令第十二号」である。これは「……学科課程に関し法令の規定ある学校に於ては課程の外たりとも宗教上の教育を施し又は宗教上の儀式を行ふことを許さざるべし。」というものであり、公立学校と同様の上級学校進学や兵役免除などの権利をもつ公教育体制内にとどまろうとすれば、宗教教育を放棄しなければならぬとするものであり、当時の条約改正に伴う内地雑居の懸念から、明らかにキリスト教主義学校の発展にブレーキをかけようとしたものである。この訓令はキリスト教主義学校を等しく苦悩におとし入れるものであった。ブースは三十三年米國本部への報告に「文部省は、日本の憲法で保証されたのは信教の自由で宣教の自由ではないと説

明して居る」と述べているが、ここに困難に立たされた彼のとまどいと苦しみがみられるのである。しかしブースは、この事態にあって、学校としては高度の教育内容をもちながら、高等女学校や、これに準ずる特別の文部省指定校とならず、むしろ宗教教育を堅持して各種学校の地位に甘んじたのである。明治三十五年に教頭として就任し、二十年間ブースの片腕となって働いた岩佐琢蔵は、就任後まもなくフェリスが高等女学校、または専門学校として発展する道をブースにすすめたが、この問題に対して、ブースが常に決然たる態度でノーを表明したことを次のように述べている。「先生は断乎としてフェリス女学校は雑種学校で宣しいと主張された。聖書を正課として教へ自由に基督教々育を授けるには、雑種学校が一番だと言はれるのです。それでは学校の発展が困難だと申しますと主義の為に学校が減びても止むを得ないと、一步も枉げぬ決心を示されたのでした。それ故学校の発展の為には八方困難に戦はねばならぬ、先生も私も生命懸けでした。」³⁾このようにブース自身は女子高等普通教育を強く願いながら、公教育体制からはずれた職業教育の道を選んだのであるが、三十二年十月「私立学校令」によって認可をうけた際に付記した規則には、その目的として「智徳体三育を兼ねたる基督教教育を施」して、「聰明なる基督教女子の品格を養成する事が明確にうたわれ、廃せられていた高等科のかわりに聖書科において、将来キリスト教的事業、教育に従事するものを育てようとした。また三十三年に出た教員検定規則はミッション女学校出身者の教員免状受験資格を取消したもので、創立以来徹底した英語教育で多くの教師を生み出していたフェリスのいたく打撃をこうむるところであったが、歴史が古く、特に英語と音楽に優れていたところから、このような事態にあっては卒業生はすぐ世に立つことができたのである。しかし、後にも述べるように、キリスト教的教育理念を日本の現状の中に実現してゆくためには、フェリスが日本の社会、文化から遊離した存在でなく、そこに根づいた学校、つまり、「日本の学校」であることがまず必要なことであると考え、右のような事情の中で校名を英和から「フェリス和英女学校」に変更したのである。この

点について、大正九年の開校五十年記念式においてブースは、フェリス女学校はあらゆる意味で日本の学校でなければならず、西洋人教師は補助者にすぎないことから和を先にし英を後にしたと述べている。このような姿勢は、明治三十二、三年頃の状況を反映して初めてでてきたというよりブースが就任当時から追求し続けてきた方向であり、外部との交渉などにはできるだけ日本人教頭をたて、校長に替わる権限を与えてもりたててきたことなども岩佐琢蔵が証言しているところである。このようなブースの基本的態度は、右の記念式席上、理事長オルトマン博士がフェリスの目的として述べた三つの要点に一そうはっきり示されている。それらは第一に遅れている女子を、女子自身の人格のため、そして社会のために男子と等しく教育することであり、第二にキリスト教的に女子を教育すること、第三にそのキリスト教々育は日本の女子を日本の条件のもとで、真の日本の精神をプラスすることによって行われねばならない、ということであった。日本的諸条件を考慮しながら、日本社会に深く根づいた「日本の学校」という意図はともかく、真の日本の精神を重視するというのはどういう意味であろうか。単にその時代の国家的要請に応えたジェスチャアであろうか。ブースの思想においてもこの点は特徴的にでているが、国民主義的な明治期の世情を反映するこの教育理念の一つの要素において、ブースは果して何を意味しようとしたかここで正しく理解する必要がある。

ブースは日本に滞在すること長く、その教育を真実なものとするために日本社会を積極的に理解しようとしたことから、その文化的価値、歴史的諸問題等の事情によく通じていた。彼が「ヤマトダマシイ校長」の異名をもつほど、機会あるごとに生徒達に大和魂の喚起を促し、これを大切にすることをすすめたのは、彼が忠君愛国的な明治の国家主義思想に迎合したことでは決してない。それは日本のすぐれた伝統的文化価値の端的な表明、日本人の正義感、純粹さ、真面さ、力強さなどの根拠とみて、その普遍性を認識したのである。そのような認識の背後には、日本に福音を伝えることを自分に与えられた生涯の使命であると信じて、日本を愛し、日本人と苦しみを共にしえた豊かな愛情

と神の真理に開かれた偏見のない柔軟な思考とがあった。そこから、ある時は落語に日本のすぐれたエロキューションを見出して生徒を激励し、また勉学に大和魂を喚起したのである。従って、大和魂のプラスの面こそ高く評価したが、マイナス面も決して見落すことはなかった。日露戦争時には、酷寒の地で肉親を離れて戦う兵士達のために慰問袋はもちろん特別製の靴下を編むことを生徒達に命じ、乃木將軍の二子が戦死した時は吾子を失ったように泣き、日本が勝利した時、歓喜する横浜市民と思わずバンザイを叫んだブースは、戦後も、戦勝したとはいえ日本は多大の負債をかかえており、それは国民一人当り三十円の負債であるとして生徒に儉約を説いた。しかしこのことはブースが戦争を無原則に肯定し、日本の国策に無批判に協力したことを意味しない。例えば第一次大戦勃発時には、彼はキリスト者が戦争に臨むべき態度として次のように記している。⁽⁴⁾すなわち教育の場においては、戦争に対して須らく中立の立場で、なぜ戦争に起るのか、戦争の必要性はどこにあるのかを冷静に考えねばならない。しかし、我々にとって今確実なことは、あらゆる場合に、真理、正義などの精神的力が物質的に勝利する機会を与えるよう努力しなければならぬということである。「勝てば官軍」はあやまった前提である。神を地上の王として、いかに代償が大きくとも、神の義が最後の勝利を占めることを信じ、「神の国への新しい広い真実の愛国心」が人類の精神に浸透することを絶えず祈るべきであるというのである。

ブースは日本の女子を娘のようにいつくしみ育てたが、その女子教育の理念は基本的には「汝ら往きてもろもろの国人を教え……わが汝等に命ぜし凡ての事を守るべきことを教えよ」というキリストの言葉の忠実な実行に支えられたものであり、これを女子教育を通じてなそうとするものであった。日本に福音を伝えるために、まず女子に伝え、家庭から普及するという宣教上の理由から女子が重要な対象として意味をもっていたのである。⁽⁵⁾従ってフェリスはな

によりもまず「山の上にてたてられた救いの城、暗夜を照す導きの光」でなければならなかった。しかしブースは真剣に女子のキリスト教教育を考ふるうち、単に伝道の域に止まらず、日本の女子高等教育の問題としてこれに取組み、日本の女子の、家庭、社会における地位と日本社会の歴史的、社会的、政治的事情の中で優れた特色ある教育を追求するにいたっている。ブースはミッション・スクールにありがちな、日本の土壤に根づかない上すべりのなモダン学校といたずらに西欧化された「ハイカラ女性」を強く排し、日本女性の封建的差別の中から生じた気弱さや暗さなどには是正を求めたが、そのしとやかさ質実さ、忍耐心などは高く評価した。そしてその資質に、神への信頼に基づく内なる強さと積極性と明朗さをプラスすること、ブースの言葉でいえば「真のキリスト者的人格を備えた日本婦人らしいとやかな婦人」を願ったのである。

明治十七年五月につくられた現存の最も古い学校規定によると当時の社会的要請を反映して「家は邦国の本なり。苟くも家にして齊はずんば邦国の化育も望む可らず。女教は齊家の由り起る所なり。苟くも女教にして作るなくんば、齊家の美果を期す可らず、是れ、今日において女学校の設立無かる可らざる所以なり。」と述べられているが、ここにあるような、女子が家庭の形成者であるという趣旨は、無論、女子を家庭に閉じこめる所謂良妻賢母主義の表明ではなくより高い理念につらなる一環であったことはブース自身が「本校は日本の女子をして其身体、精神を適意に用ゐて、個人のため、家庭のため、国家のために尽すべきことを教え、凡てのこと働きて、吾等の造物主たる神の栄光をあらわさんため」⁽⁶⁾(大正九年)と述べている言葉に明らかである。また明治二十——二十一年の「布恵利須英和女学校一覽」には「当時婦女の状態を顧みるに多くは不学にして智識乏しく随て世に重んぜられず其社会に於ける地位も亦卑下なるを免れざりき是れ創立者が斯校の設立を企てたる所以にして其目的婦女に適當の教育を授け旧來の弊習を改良せんとするにあり」と創立の趣旨にふれ、さらに「婦女は室家の和樂、社会の幸福の本源と称すべきもの」

であり、「其居る所の地位に応しい種々の関係より生ずる職務を敏捷に処理する必要」がある。従って「婦人の婦人たる責任と他人に対するの義務を熟知し、一身の幸福は論を俟たず其家族及び社会の幸福を進歩する為め」それにふさわしい教育がほどこさなければならぬと明言している。このような婦人認識、そして女子自身と社会的責任のための教育という、キリスト教に支えられた個人主義的にかつ社会に開かれた女子教育論は、啓蒙思想や民権論の未だ有力であった明治二十年当時と、大正デモクラシー期にして、このような明快さをもちえたともいえるが、フェリスの女子教育が、まず女子自身のため、そして家庭、国家、人類社会を経て、神の栄光のために行わなければならないという議論は、ブース自身の一貫した主張であった。いかえれば、彼の思想の特徴は、個人から、一足とびに人類や神への奉仕といった観念的な形式をとらず、常に、家庭や、国家といったコミュニティに対する具体的な奉仕の中に、個人としての真のあり方、人類や神への奉仕のあり方を示すところにあった。ある卒業生は、ブースによるエロキューションの授業で、派手な西欧風の仕草にきまり悪く笑っている生徒達に向かって「あなたがたは今そうして笑っているが、いつなん時、国家の為、立って弁論せねばならぬ場合が来るかもしれない、あなた方はその時、勇敢に堂々と話さねばならぬ」とさとしたブースの思い出をひもときながら、次のように語っている。「ブース先生の最大の目的は私共をしてその立場が家庭であろうと、社会であろうと神の国のため立って弁論し、キリストの証人と為らしめる事で、学校の授業は、英語とはいはず、その他凡べての学科を通じて、それに必要な備へをなし、それに相応しき人格を礎きあげる事でありました。しかし一方に於てこの様に私共に国家を忘れぬ様、日本人らしく在る様日本に意義ある存在たる様董陶を怠られませんでした。先生が真に神より日本に使はされた方として日本の為私共の為め全心全霊を打込まれたからだと信じます。」

大正十一年三月、ブースにとっては最後の生徒を送り出す卒業式において、彼は次のように述べた。フェリスは

「生徒の知性と心のうちに、キリストにならう奉仕の生活を、家庭に、社会に、世界にあって熱望し、実践しようとする願いの火をもえたさせることを目的とした。それはアメリカナイズを求めたのではなくクリスチャナイズを求めたのだ。世界が互いにより理解の状態に達しえ、各国民間に平和的關係を維持しようようになるには、その実践はまず家庭から始め、そして国家的レベルに、さらに国際間に拡げられねばならない。『Do unto others as ye would that others should do unto you』というイエスの教えは、家庭や社会、国家及び国際的行為におけるマグナカルタとならねばならない。これが我々の目標であった。ああ、しかしこの四十年間なんとわずかしか実現されなかったことか、しかし約束のしるしはある。いくつかの種はすでにまかれた。それらはおい育ちいまや実を結びつつある。……四十年間、（私は）家庭のためばかりでなく日本社会を改良し、向上させる婦人の教育という、かよい苗木を大事にそだててきた。……私は、あなたがた（日本人教師）とともにこの仕事に従事することのできた恵を心から歓びとするものである。……」〔（ ）内は筆者〕。

このようにブースのキリスト教的女子教育理念は、日本文明の進歩に真の意味で資することのできる女性の教育という所に力点がおかれており、その点で日本の女子教育と宣教とが統一されていた。しかもそれは日本社会の要求するものとの安易な癒着でなく、日本の公教育の体質を根源的に批判する内容のものであった。いいかえれば、在来の大和魂やしとやかさ、良妻賢母主義や国民主義にキリスト教精神を並列的に附加し総合した教育ではなく、あくまでキリストの福音によって転換せられた教育的価値を基礎として、新たに編制しなおされた教育理念であり、この理念と矛盾する教育論やその実現をはばむ力に対してブースは充分に自覚的に対決し、理論的に克服しているのである。例えば、「宗教と教育との関係」⁽⁸⁾という論文では、日本の教育制度についてふれ、今日の教育の「大制度」なるものが全く宗教を度外視ないし縁遠いものとして疎んじているにもかかわらず、宗教と教育との間には何らかの生きた関

係が存在しておらねばならないと感じるのが、人間精神の自然の本性に基づく感情であるといい、両者の本質的関連を明らかにするため、そもそも教育とは何であるか、そして真の宗教とはどのようなものであるかを述べることによってその間の一致点を明らかにしようとする。もし教育が身体や心意を訓練し以て利己的欲望を達し、個人の名誉心貪婪心を満足させることに上達させる努力を指して言うとすれば、この種の教育と真の宗教とは何の関係もないといえる。衰退しつつある拝物教のようなものならあるいは多少の役に立つかもしれないと、功利主義的教育観をまずきつぱりと拒絶する。さらにブースは教育というものをこれより少しく超越的目標に奉仕せしめるとして、次に、国家のためその最高の任務を遂行するに足る人物を養成するため身体的知的道徳的訓練を与えるものとして教育を考える。この場合、国家がその必要上、政策的に無宗教の立場をとれば、当然宗教は教育から切り離されることになるとして、国家主義的教育には真の宗教の入り込む余地のないことを明確にする。しかし最後に、もし教育なるものが、身体、知性、徳性、さらには靈性上の訓練、いかえれば人たるものの最奥の関心と熱情にふれるような人生の能力を發揮するに必要な訓練をほどこすことと考えるならば、そのような教育は必ずや真の宗教と活ける関係をもつという。このようにブースは教育をもって、人間の本質にある実存的要求に根ざした機能として高く規定することにより、教育が真の宗教と係わらざるをえない必然性に説き及ぶのである。そして真の宗教については、ヘンリー・スクーガール Henry Scougall の「真の宗教とは人の靈と神との一致で、神性の真の賦与で、人の靈の上に描き出されたる神の肖像である。之を使徒の言葉で言ひ表はすと『キリスト』を我等の裡に宿すことである」との言葉によって、宗教とは人の靈における神の生活であるという。これは神が自分を「キリスト」の人格に於て人類に啓示し給ふた福音を受入れ、我等の裡にキリストを迎え入れ宿すことであり、ここに人格形成の根本があるという。キリストは人格的生命の源であり、それ故、人を真に生かしめる宗教はキリスト教であり、従って、これを基盤とすることによって、

はじめて真に価値ある教育は行われうる。実に、このようにして人の霊に与えられる神的生命は、神が人類に賦与した一切の身体的靈性的能力、又一切の知的道德的機能に正しい活動の動機を与えるものであり、ここに宗教が教育に對してもつ生ける重要な関係が存在するといふのである。従つて教育の基盤としてキリスト教が必要とされるのであるが、学生自身も、神がキリストによって靈的生命を与えられたことを深く認識して、神との交わりによって日ごと新しくされる修養 *self-culture* につとめなければならぬといふ。このようなブースの宗教と教育との明解な關係論は、人間の靈的能力が強調されすぎキリストの人格に啓示された神性を受け入れることにキリスト教主義教育の基本を求めており、人間の罪の深い理解とキリストによる救いの意味とその教育的基礎づけがなされていないうらみはあるが、この教育理念を明治期の日本の教育体制の中において考える時、眞實の教育を要求する声として充分意義をもつてくるのである。特にこの明治末期、政府はたてまえとして宗教教育を否定しながら、現実には、国民道德、国民教育の立直しをはかり、各宗教をこの目的に奉仕せしめようとした歴史的背景を考える時、臣民教育への宗教のゆがめられた奉仕でなく、眞實の教育を求め、そこに眞の宗教を基礎づけようとした意味で一そう意義深いのである。

また『白菊』二号（明治四十一年）では、日本の女子の知識熱が昨今急速にのびてきたことを指摘しながら、フェリスの教育は単にそのような知的要求にだけ答えるものではない。知識は目的のための道具であり手段であるにすぎず、その目的如何では、良くも悪くも用いられる。従つて、教育の主眼はその知識を用いる主体の道德的資質の開發におかれねばならないとして、キリスト教的道德主体の形成について論じている。これも、明治末期、特に日露戦争後の国民道德弛緩状況の中で、各方面から叫ばれた道德教育振興の声に応えたものである。道德性開發の具体的な方法について、ブースは当時、一般に行われていた道德論を批判して別のあり方を提示するのであるが、方法論を論じながら実は、当時の道德論が、教育の一部としての德育に関する議論であつたのに對して、彼は、全人格的な意味

で、教育の目的そのものに係わる道徳論を展開している。彼はこれまで道徳性開発のため様々な方法が講じられ、それぞれに応じた結果がもたらされたという。そのうちの有力な方法の一つは、英雄、賢人の言行を基として、行為の模範をもうけ、青年達に、そのように行動すべきであると教える方法である。しかしブースによれば「川はその源より高い所には流れない」のであってその基、模範となるべき存在が、所詮限界ある人間であれば、このような方法による董陶は当然模範以上の高い点に達することはできない。第二のポピュラーな道徳論として、愛国心の喚起があげられる。ブースによれば、己れの国家に対する忠愛の精神は、道徳上の感覚を刺激する方法として強く唱道されているところのものであるが、これは常に反対給付として、他国を軽侮しようとする弊害、危険を伴うものであるから、真の道徳性の開発にならない。むしろ他の権利責任を正當に尊重しようとする愛国の真精神をとるべきであるとする。この点について「これが国家の盛運に重大な影響を与えるため、陛下もしばしば詔勅を発し、永遠不朽なる正義と衡平の原理を述べて警告を与えられた」としている。しかし右の二つの方法は概して失敗であると、日本の徳育の一般的特徴であった儒教主義と国家主義を批判し、むしろ人の道徳的能力はその本質において、徳目主義的に「惇々たる教訓 [inculcation] を垂れる注入主義より、むしろ主体の自発的な模倣 [imitation] によってのみ、能く刺戟され陶冶されるという。そしてその場合最重要なる理想者は、己れの意志からでなく、彼を送った神の意志を行うためにきただけ一人の完全な人——イエス・キリストでしかないという。イエスは「まず神の国を求めよ」といい「天の父が完全であるようにあなた方も完全であれ」と命じ、そして「私に従ってきなさい」と呼びかける。このイエスに従い、イエスによってさしめられる神に信頼する所に道徳的主体は形成されるというのである。先の「布恵利須英和女学校一覽」もその教育趣旨に「惟ふに道徳上の品性を開発するには修身書の訓戒を講習記憶せしむるより専ら基督教を遵俸し其教ゆる所の真理を研究して躬ら之を實施履踐せしむるを以て遙に勝れりとす……上帝の崇拜は以て良心の感

覚を鋭敏ならしむべし是れ本校の特に基督教の礼拝を以て徳育の基礎とせし所以なり」と述べて、従来の儒教主義的徳育を廃してキリスト教的人格形成を行うことを明言している。ブースは続けて、実にイエス・キリストにおいてこそ、神と共なる新しい道徳生活の活ける原理が肉体化されており、そこに実践的力の源泉がある。このキリストにまねび従うことこそ「諸子が、キリスト信徒たる母として子孫に教へ、以て日本の新時代を将来する所以の新武士道の淵源」であるというのである。それだけの議論ではキリストにならうことの福音的意味は充分展開されていないが、少くとも、ブースのいう「模倣」の意味が、第一の場合のように人間イエスを道徳的模範することとは全く異質に、イエスにおいて道徳性の基本を神におくことを示したものであることは明らかである。こうしてブースは、キリストを心に迎えることによって新しい価値ある人生——人に仕える人生を見出し、キリストを通じて神からの新しい生命に日々力づけられ、生き生きとした人生を歩むことこそ道徳的主体形成の眼目であると「大日本の娘たち」に示したのである。

このようにしてブースはキリスト教を教育の中間に、位置づけ、しかも原理的に対立矛盾する人間形成論に対しても明確に対決的姿勢を維持していたといえる。しかしその対し方は決して対立そのものではなく、すでにみたように、「大和魂」や「武士道」「愛国心」「しとやかさ」といった、伝統的な文化価値のうちからプラスのものは積極的に維持し、また、「家庭」や「国家」といった具体的なコミュニティへの奉仕も一概に否定することなく、むしろ、それらへの正しい献身のあり方に、個人として、また神に仕えるものとして普遍的なあり方を示そうとした。すなわち、特殊な文化的価値、コミュニティへの愛と献身のもつプラスの意義を単に狭い世界にとじこめず、その中にキリストの福音をうちたてたことによって、それらを世界、人類、神に開かれたものたらしめること、いわば、文化内在的な価値の変容を願っていたといえるのである。

ブースは大正六年「……多年我が国女子教育ニ貢献シタル効績尠カラズ又常ニ恤窮ニ力竭ス等洵ニ公衆ノ利益ヲ興シ」たなどの理由で、監綬褒章を贈られたが、これはこの褒章の外国人に与えられた第八番目であった。

ブースはキリストの忠実な僕として神への信頼のもとに、大きなヴィジョンを抱きながら、青年のように生き生きとその実現のためにたゆまぬ努力をつづけ、困難の中にもその心は常に明るく無邪気で純心であった。また彼は厳格で高潔な人柄の反面、柔和でユーモアに富み、詩情溢れる人であった。彼は生徒に、何事にも喜び感謝し明朗であることを教え、実に細やかな行届いた配慮と愛情をもって父親の如く生徒に接し、また生徒のために学校の改善を怠らなかつた。ブースは何より、神によって活かされる人生を日本の女子に伝えようとしたのであるが、正に彼の生涯そのものが、神によって生かされた忠実で喜びに溢れた力強い生活の見本であったということが出来る。彼はよく生徒に実行するもの *doer* になれといった。しかしまた、*doing* の前に *being* でなければならぬといった。彼は、朝な夕なの礼拝や聖書講義ではもちろん、その生活、生徒との接触の一つ一つにおいて、言葉で語る以上に真のクリスマス・ライフを示したといえる。キリスト教的な女子教育をめざす学園にあって、ミス・ブースをよき伴侶とする彼の家庭生活は優れたクリスマス・チャンホームの典型として生徒達に大きな影響を与えた。ブース一家を中心とする生活ぐるみの学校において、生徒達は期せずして、美しい家庭のあり方、夫婦のあり方、親子のあり方を学んだのである。ブースを父とすれば母とも慕われたミス・ブースもまた、日本をこよなく愛し、宣教師として三八年のうち三年をフェリスに献げ、教師であるとともにブースのよき片腕であったが、大正五年、休暇で帰米中、例によってブースが拡張資金募集のため米国各地を奔走しつつある留守中、急病にて他界したのである。

明治十四年紅顔の青年を以てフェリスに来たブースは大正十一年白髪の老令をもって、設置されたばかりのミッション停年規則により校長の職を去ることになったが、これが本人にとっても学校にとっても甚だ不本意なものであつ

たことはいうまでもない。彼は最後の卒業生を「私の可愛い末っ児達」と呼んでいとおしみながら、しかし長年丹精した学校を去るにあたって、いさぎよく住みなれた日本も去る決意をしたのである。母国アメリカはすでに彼にとつてストレンジな国であったが、彼はフェリスの後継者が、自由に新しい仕事に打込めるよう一切をゆだねて日本を去ったのである。来校した時二十人たらずだった学校もすぐに六百人の生徒をかかえる堂々たる学校に成長していた。大正十一年十月の謝恩送別会は学校はじまって以来の盛会で内外人がブースの功績をたたえて集まったが、その席上彼は「自分は終始この学校の成功を期している。然しそれよりも、もっと以上に希っていることは、此処にある一人一人がキリストを主として受け入れることである」と述べたのである。

ブースが去って一年目、はからずも彼が苦心して築きあげた近代的な校舎は関東大震災によって焼失した。彼は米国にあって病身にもかかわらず、各地をめぐって母校復旧事業に協力したが、昭和四年の新校舎献堂式には、同窓会あての匿名の寄附によりブースはなつかしい母校の土を踏み、再び教え子達に会うことができたのである。その時彼は「ワンダフル」を連発して、よみがえった校舎と、またなにより期せずして可能となった再会に感激した。こうして震災の不幸にもかかわらず復興を危ぶまれたフェリスが立派に立ち直ることができたのは、ブースによってすでにしつかりした無形の基盤が築かれていたからである。ブースは帰国後約一年半あまりのち、日本を想いフェリスを想いながら「私の国、私の娘たち」とくりかえしながら八十一才の生涯をとじた。ちなみにその長男フランク・S・ブースも父とは異なった分野で、民間人として日本の遅れた水産、農業、畜産、林業等の開発に生涯をささげ、もって勲三等に叙されている。

ミッション・スクールは日本社会における文化的、価値的な意味での西欧の植民地のように、一般社会と隔絶した

特殊共同体になる可能性が常にあった。それは一般社会に通用する価値に対立するものを育てる意味で必要とされる姿でもあったが、しかし、我々はブースの教育に、むしろ、それぞれの時代の社会的諸問題の只中に敢えてその教育を位置づけながら、力強く世俗的文化に対応していった例をみることが出来る。高い理想、唯一の真理のためには一歩も譲歩することなく否定すべきものは決然と拒否し、しかも、日本社会においてとるべき価値は積極的に保存して、その古い皮袋にも新しい酒を注ぐことによって新しい意味をもたせようとしたのである。そして独立の人格的個人として自分のおかれた社会に対し批判的建設的に臨みうる高い教養をもった指導的婦人を育てようとしたのである。

大正五年ブース夫妻の一時帰米に際して、平野はま子は謝辞の中で、フェリスで教育をうけたことは、日本のある女性達にとって新紀元の始まりであったとし、この時から彼女らは機械や奴隷でなく女性として自覚した存在となると同時に、自ら社会のメンバー、国家、世界の一部として自己実現を意識するに至った。それは基本的に神のイメージとして生きた魂をもつ独立の人格としての實在に自ら目覚めたことであり、そこから彼女らは義務と責任の念を感じはじめ、自分自身のためばかりでなく、全人類のために生を満してゆくことを知った、と述べているが、ブースがめざしたのは実にこのような教育であったということが出来る。つまりその教育思想の特質を端的に述べるなら、まず第一にキリストに忠実なる教育、第二に女子の高等普通教育、そして、第三に日本社会に根づいた教育の三つの要素に要約することができよう。

註

- (1) 『ジャパン・アドヴァタイザー』誌、一九二二年、八月二日。
- (2) 青山なお『明治女学校の研究』参照。
- (3) 岩佐琢藏「ブース先生と私」『思師の面影』。

- (4) 『白菊』八号、大正四年。
- (5) 「日本の女子は、東洋に於ける私共の先鋒で御さいます。『男子は、女子の意のまま』と申しますが、実に日本に於ける活動の作戦上の基礎は、日本の女子で御さいます……日本の女子が基督の軍勢の旗下に加えられますまでは、日本は決して、この基督教国とは、なり得ないので御さいます。」(婦人伝道局年会におけるブース夫人の談話) 『白菊』十一号、「故ブース夫人記念号」大正六年。
- (6) 開校五十年記念会式における挨拶。
- (7) 『思い出』五九—六十ページ。
- (8) 『白菊』四号、明治四十三年。

〔追記〕 この論文はキリスト教学校教育同盟の『人物史によるキリスト教学校教育史』のために、フェリス関係の教育者のうち、筆者が特にユージン・S・ブースを選んで短くまとめたものの土台となった原稿である。従来フェリスの歴史において、創立者ミス・キダーだけがよく知られ高く評価されており、これは彼女の開拓者としての意義を称え記憶するためには当然であるが、実質的にフェリスを学校として確立したのは第二代校長ブースであったといっている。その功績は単に校舎、設備、制度といった外観、有形のものにとどまらず、キリスト教主義教育を実質的なものとし、それを生命とするフェリスのいわば校風、伝統ともなるべきものを築いたのもブースであったといえる。筆者がブースをとりあげたのは第一にその忘れてならない人物の業績を歴史上正しく評価し記憶する必要があることと、第二にブースがただ形式的な第二代校長の位置にとどまらず、教育者、それもキリスト教女子教育者としてユニークな優れた思想をもってこの職務に臨んだことに興味を抱いたからである。とかく学校史は表面的な業績だけが記述され、その人物の個性や思想まで深く発掘紹介されないのが通常であり、これはブースの場合に限ったことではないが、特に筆者はフェリスの歴史のうちに光るブースの人物にひかれたのである。第三の理由は、今日キリスト教主義学校の存立意義が問われている時、歴史的事情は大きく異なっている、その形成期をふりかえり、そこに求められるキリスト教教育の一つの原型を明らかにすることは、この問題に関して何らかの示唆を与えることになるであろうと考えたからである。

この論文の執筆にあたっては主にフェリス女学院資料室の文献を利用させていただいた。関係者に謝意を表したい。研究をすす

める過程で、ブースの行動範囲の広さから、関係資料は外部にも見出せそうであったが、時間的余裕がなく、それらを充分用いることができなかった。そのためこの論文は筆者としては甚だ意に満たないものであるが、敢えて中間レポートとして掲載することにする。

Eugene S. Booth and his Christian Ideas of Education for Women

Minako Suzuki

ABSTRACT

The Rev. Eugene S. Booth (1850-1931), Doctor of Divinity, was the second principal of Ferris Seminary who had established systems, facilities and also spirit of the school, which was still very small with only 18 pupils when he was placed in charge of it. He dedicated more than 40 years of his life, 1881-1922, for bringing up the tender plants of education for women in Japan with devoted and constructive service.

In speaking of his policy in the development of Ferris Seminary, Booth pointed out that it had been his policy to study the needs and conditions of Japanese society, making frequent changes necessary due to the rapid development of social conditions. In fact, he was so sensitive to and his ideas of managing school and teaching students were always so open to the needs and conditions of Japanese society, that he could fruitfully realize his vision in difficult situations.

It may be said that there were three important elements in Booth's educational work: 1. education based on the Gospel of Christ, 2. advanced education for women, 3. education corresponding with the social and cultural ethos of Japanese society. As a missionary, it being his main concern to introduce Christianity to the Japanese, he pursued

it in the process of education, especially in the education for women who were not yet independent members of the society bound in the feudal order. Soit was the efforts to make them free and equal with men as persons, responsive members of society, and also important instruments to realize the glory of God, through activities at their respective position in the community such as family and nation.

In the efforts of putting those fundamentally new ideas of education into practice, Booth thought much of the positive values in traditional Japanese society, but at the same time sharply denied the negative and wicked elements of the culture which are against the truth of Christ. Therefore he could overcome theoretically those narrow-minded ideas of national education in his period, which enhanced patriotism, maintained Confucian feudal ideas, and implied modern utilitarian egoism.